

カップラーメン

asitaba@ねこ

静かな低音の歌声が響く部屋の真ん中。
小さいテーブルの上に置かれている。
フィルムをはがされ、発泡スチロールの体が表にさらされている。
おまけに、アルミのふたをすべて取り払ってしまっている。

僕を購入した当の本人は台所で作業中のようだ。
僕の体内に注ぐお湯を沸かしているに違いない。
その間も歌声がやむことはなかった。
しかし、案外上手だ。
何度聞いても聞きあきない、彼は歌手なのだろうか。

歩数で言えば、五歩もあれば行けるであろう台所から彼が帰ってきた。
この歌が相当気に入ったのか、先ほどから同じ歌ばかり歌っている。
手には小さなやかんを持ち、テーブルの前へ座った。
片手で、僕の体を支えながら、やかんに入ったお湯を流し込む。
ふと歌うのをやめ「あっ」と声をあげたかと思えば、また台所へ向かった。
ふたをしめることができなくなっていることに気がついたのだろうか。

「はっしはっしー」

オリジナルソングをワンフレーズ口ずさみ、前にしかけたタイマーが鳴るのをじっと待つ。
手に持っているのはふたではなく、割り箸だった。
ふたはいいのか？
そう訴えかけるが、彼は全く気にしてはいないようだ。